

名古屋女子大学

31号

## 総合科学研究所だより

Research Institute of Integrated Sciences and Humanities

## 巻頭言

総合科学研究所長 渋谷 寿  
SHIBUYA Hisashi

2020年の春は、私たちが今まで経験したことのない、新型コロナウイルス感染症という見えない脅威との戦いから始まりました。何より、このウイルスに感染すると様々な症例があり、死に至る危険性もあることや、ワクチンなどの治療法が確立していないという状況の中、医療従事者の方々の極限とも言える医療現場における職務・諸問題や、経済活動という人の生業が成立しないという未経験の社会的問題、また、政治的、国家間の思惑も見え隠れするという世界的な危機感と混乱の中、私たちが大きく関わる教育、研究の在り方、そして人間の生き方という根本問題までもが問われるという事態になっています。

日本ではこの感染症について、様々な分野の専門家が、「今も収束の兆しが見えず秋から冬に向かい、本格的な流行もあり得る」と警告しています。このように、科学、医学が進んだ現代ですが、この問題から浮かび上がった、自然界の法則と人間自らの行動の関係、SNSなどの匿名性による人に対する言動の意味などについてもその根本的問題や価値観、それらに関わる教育方法についても考え直さなくてはならないでしょう。

「総合科学研究」の毎号の巻頭言では、総合科学研究所の使命として、時代の変化と最新の科学・教育との関係、そして、ハイテクとアナログ技術との関係、人間の叡智と科学的研究方法等に関する自然科学的な諸テーマを多く取り上げてきたように思います。そし

てその手法として、総合科学という人間の生活を核とした様々な機関研究やプロジェクト研究、様々な社会的貢献事業、講演会などを企画・サポートしてまいりました。

さて、コロナ禍の今後は、総合科学研究所としてはどのように活動、運営すれば良いのでしょうか。おそらく、今回の新型コロナ感染症の問題は一回きりで収束しないであろうことは多くの専門家の意見です。そうなると、新しい時代の考え方として、今回のような未知のウイルスを始めとする諸問題とはいつも隣り合わせにある人間の生き方が問われることになります。この意味では、今まで以上に総合科学研究所の研究や活動が大きな意味を持つことでしょう。すでに、機関研究としての「幼児教育で育みたい資質・能力に関する研究」の方向性は大きく変わろうとしています。幼児教育における、健康、人間関係、環境、言葉、表現の5領域における健康においては、今回の新型コロナ感染症と共存する具体的方法論が追加されることが重要だと思われます。また、それと連動して他の4領域も新たな考え方が求められると思われます。

機関研究としての、「本学における効果的なアクティブラーニングの開発」という大学の授業法の研究も、新たな分野もしくは研究の方向性を、今までの当たり前だと信じて疑わなかった対面授業における研究内容に、リモート授業の可能性や、その教育効果の検証などは必須の研究テーマになると考えられます。

今後の総合科学研究所としては、人間が幸せに生きていく上で、謙虚になって自然と向き合い、世界的な持続可能な社会を生み出すべくその研究方法を変化させ、成果を社会に発信していく責務があると考えます。総合科学研究所で取り組んでいる、今後の社会に大きな提言をしていこうとする、機関研究、プロジェクト研究、地域貢献事業などの本学総合科学研究所の研究や活動へのご理解とご協力をお願いいたします。

令和元年度  
「開かれた地域貢献事業」  
報告

名古屋市瑞穂区役所

## 「育休復帰応援講座 時短レシピでクッキング!」を終えて

名古屋市瑞穂区役所 民生子ども課民生子ども係長 村井史朗

今回で2回目となる瑞穂区役所民生子ども課と名古屋女子大学とのコラボ企画であるみだしのイベントを、令和元年8月31日(土)に開催しました。育休中の方を対象に、時短料理に関する講義及び実習と保育所等の入所手続き・保育無償化に関するプレゼンテーションを行いました。併せて、より気軽に参加いただけるよう別室を設け、託児サークルと名古屋女子大学の学生とによる託児事業も実施しました。

参加者の方からは、「手軽に栄養バランスの良いおいしい料理を学ぶことができた」、「最新の保育園の情報を入手出来てよかった」、「子供を預けて参加できたことで自分自身もリフレッシュできた」など概ね好評でした。また、グループ調理ということもあり、「グループ内で子育てに関する様々な情報交換を図ることができた」と

の声もいただいています。

今後も、名古屋女子大学との連携を深め、地域の方にとって有意義な企画を実施していきたいと考えています。



調理の様子



完成した料理

令和元年度  
「開かれた地域貢献事業」  
報告

名古屋市保健所瑞穂保健センター  
「若返りきらきらセミナー」を終えて

名古屋女子大学 総合科学研究所 事務

瑞穂保健センターと名古屋女子大学は、平成21年度より高齢者の介護予防を目的とした「若返りきらきらセミナー」を共催で開催しております。このセミナーは、名古屋女子大学の教員が講師となって実施し、毎年区民の皆様から大変好評をいただいております。

令和元年度につきましても、9月から2月までの間に6日間のコースが企画され、60歳代から80歳代の方26名が参加されました。

1日目の「ピラティスの要素を使った軽運動」では、体幹を鍛え、姿勢をよくするための呼吸を意識したエクササイズとストレッチを行いました。2日目の「自分だけのTシャツを作ろう!」では、できあがりのデザインを想像しながら、世界で1枚だけのオリジナルTシャツを作ることができました。3日目の「なつかしい唱歌、童謡をうたいましょう」では、懐かしい思い出を感じながら大きな声で歌を歌い、頭を使ったリズムゲームも、皆さん苦戦をしながらも笑顔で楽しく参加されていました。4日目の「遊び字

習字アート」では、筆ペンやパステルを使って、気持ちのこもったあたたかい絵葉書が完成しました。5日目の「野菜たっぷりの生春巻き作り」では、不足しがちな野菜をおいしく簡単に食べることができ、後半では味覚や嗅覚の衰えをチェックするテストを行い、認知予防の意識を高めることができました。

6日目の「高齢期に作って食べたいスイーツ作り!」は、新型コロナウイルス感染予防のため残念ながら開催できませんでしたが、本年度も参加者の皆さんは、期間限定のキャンパスライフを満喫されていました。

講話だけでなく、運動や作品制作、音楽療法や調理実習などアクティビティーを取り入れた多彩なセミナーとなりました。参加者同士の会話や学生との触れ合いを通して人との関わりを楽しみ、様々な体験を通して健康意識や日々の活力を高めていただけたのではないかと思います。



ピラティスの要素を使った軽運動



オリジナルTシャツ作り



遊び字習字アート



野菜たっぷりの生春巻き作り

令和元年度  
「開かれた地域貢献事業」  
報告

名古屋市瑞穂児童館  
令和元年度の共催事業を終えて

名古屋女子大学 総合科学研究所 事務

令和元年度は、7月より10講座とクリスマスイベントの開催を予定しておりましたが、年度末から猛威を振った新型コロナウイルスの影響で、共催事業の一部中止を余儀なくされました。非常に残念であると共に、最後まで開催のため準備を進めてくださった講師の先生方や学生の皆さんには、あらためて感謝を申し上げます。

さて、令和元年度も0歳から高校生世代までの幅広い年齢の子どもたちや保護者を対象に、さまざまな交流企画を実施して頂きました。

主に乳幼児親子を対象とした「子育て支援」企画では、どの講座をみても親子のスキンシップを図りつつ、子どもたちの感覚や好奇心をくすぐるような多彩なプログラムで構成されており、大学ならではの高い専門性が活かされたものでした。

また、アンケート集計結果をみると、学生の皆さんに対して好感を抱く感想が多数寄せられています。

児童館だけではなかなか実現できない大学生世代と乳幼児親子の交流は、名古屋女子大学と児童館の地域交流事業ならではの特徴と

もいえるでしょう。今後も、双方にとって、有意義な「子育て支援」の企画に期待しております。

一方、「児童健全育成」企画は、楽しく参加するだけでなく、調理や制作、実験などとおし、子どもたちの好奇心を引き出し、完成を目指す工程の中で、創造力や達成感を存分に味わえる内容になっていました。本格的な工具を使用したり、大学という整備された環境の中で事業に参加させて頂けることは、子どもたちにとって非常に魅力的で貴重な経験になったことでしょう。

今後も、大学の専門的な知識や学生さんたちの新鮮で豊かな発想を提供して頂き、子どもたちの健やかな成長へと繋げていけるよう、名古屋女子大学と児童館が協働して、企画の開催に努めて行く所存です。

最後に、次年度の地域交流事業は、新型コロナウイルスの影響で、これまでどおりの開催とは行かないことも予想されます。与えられた環境の中、少しでも地域の皆さんに笑顔が届けられることを願っています。



親子で楽しむ音楽あそび



よくかむグミを作ろう!



木材を利用したおもちゃ作り



クリスマスのオーナメントクッキー作り



## 機関研究

## 「大学における効果的な授業法の研究 8」

～本学における効果的なアクティブラーニングの開発～

三宅元子代・市村由貴・河合玲子・佐々木基裕・渋谷 寿・杉原央樹・竹内正裕・遠山佳治・羽澄直子・服部幹雄・野内友規・山田勝洋・吉川直志

本研究は平成30年度からの3年を期間とし、今年度が研究の最終年度となります。初年度は、おもに大学教育に求められているアクティブラーニング（以下、AL）の手法について検討し、共通理解を深めました。2年の前半には、本学の学部・学科の特性に応じたALの手法を見いだすため、各研究員が実践しているAL型授業の実践について発表・討論し、授業の効果について意見交換を行いました。後半では、「ALを通してどのような資質・能力を育てるか」に関する明確な目標と評価研究を深めるため、松下佳代編著

「ディープ・アクティブラーニング」をテキストとして輪読し全体で討論しました。今年度は、ひき続き同氏編著の「アクティブラーニングの評価」を使い、輪読した後これら2年間の研究成果をふまえ、さらにはアフターコロナのニューノーマルといわれる新たな日常（三密を防ぐ等）に対応した大学教育におけるALを活用した授業法（遠隔授業を含む）についても提案し、本学学部・学科の特性に応じた授業法と評価についてまとめる予定です。

(文責：三宅元子)

## 機関研究

## 「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

佐々木基裕代・河合玲子・遠山佳治・豊永洵子・三宅元子・吉川直志・吉田文

本研究は令和元年度～3年度の3年間にわたって行われるものです。本年度は、その2年目に当たります。前期研究を引き継ぎながら、越原春子先生の建学の精神、教育理念を戦後昭和期の日本の女子教育史の中に位置付けていく共同研究と、それを視野に入れた各メンバーの専門分野に基づいた個人研究を同時並行に進めています。

共同研究においては、学校情報の整理を目的とした関連教職員へのインタビューを計画しております。昨年度には、本学に長く勤め

られた先生への聞き取り調査を行いました。本年度も、新型コロナウイルスへの対策を講じつつ、継続した調査を予定しています。

個人研究に関しては、研究メンバーが自らの専門性に基づいた研究を進めております。短期大学、大学開設へと至る戦後昭和期の本学の状況を念頭に置きながら、教育学、歴史学、音楽学、体育学、社会学等のメンバーが有する専門性を活かし、研究会議において研究発表と討論を行っています。

(文責：佐々木基裕)

## 機関研究

## 「食と健康に関する研究」

駒田格知代・伊藤美穂子・大曾基宣・小椋郁夫・近藤浩代・澤田樹美・高橋哲也

昨年度、冊子「食と健康シリーズ No.1 「かむ」ってなあ～んだ？」を完成し、学内教職員をはじめとして東海地方の全小学校に配布しました。各方面からその冊子の利用についての問い合わせもあり、本研究会としては、教育現場との協同によるアンケート調査を実施するために、アンケート内容や項目の検討を行ってきました。しかし、現時点では新型コロナウイルスの影響で小学校に実施することが困難であると考え、情勢をみながら学内の倫理委員会に審議した

後、依頼しているかと考えています。本年度は、それらを進展させるとともに、食育に関連した教材（保健用等）の作成を進めます。さらに、食と健康シリーズ No.2（表題未定）の出版に向けて、その内容を幅広く検討して、方針を早急に取りまとめて原稿の作成に取り掛かりたいと思っています。

(文責：駒田格知)

## 機関研究

## 「幼児教育で育みたい資質・能力に関する研究」

幼児保育研究グループ

今年度は、大学の先生との共同研究という形で、幼稚園教育要領の中に挙げられている子供の「10の姿」を念頭におきながら、保育の見直しを考えています。「10の姿」とは、幼児期の終わりまでに育み、小学校教育にスムーズにつながる10の視点のことです。つまり、子供にとって、目を輝かせる活動となるものは何かを、子供の姿の中に探りながら環境を整え、小学校での学びを視野に入れた指導方法を探求していくことが必要となってきます。3歳から5歳の教育が積み重なることによって、10の姿に結びつくことを、

3年間にわたる視野に立って捉えていくことが、重要となります。子供たちが、遊びや身近な環境と十分に関わる中で、心を動かす出来事に出会い、そこで得た感動を主体的にいろいろな形に表現していくことが、今求められる幼児教育の一つの姿です。これに向かい、今から3年間の指導計画、各学年の教育内容の見直しに取り組みます。

(文責：森岡とき子)

## 開かれた地域貢献事業 令和2年度事業計画紹介

本研究所では瑞穂児童館ならびに瑞穂保健センターとの交流事業を企画・運営しています。今年度も各学部の教員より、各々の専門性を活かした楽しい講座の応募がありました。瑞穂児童館との交流事業では乳幼児から小中高生を対象とし、おもちゃやお菓子を手作りして楽しむ講座など9講座を10月から3月に開催予定です。また12月のクリスマスイベントでは4講座を計画しています。いずれも例年より定員を少なく設定するなど、コロナウイルス感染予防に十分配慮して実施します。瑞穂保健センターとの交流事業で

は65歳以上の方を対象とした「若返りきらきらセミナー」として、歩行や呼吸を見直す身体づくりの講座などを5回計画していましたが、状況を踏まえて今年度は中止としました。さらに今年で3日目となる瑞穂区役所との連携事業である「育休復帰応援講座」も9月から3月に延期の予定です。例年通りの実施は困難な状況ですが、このような状況であるからこそ人とのつながりを実感できる事業の必要性を感じます。今年度も本研究所が企画する講座にご協力ください。(文責：山中なつみ)

## 大学講演会のお知らせ

## 演題

## コロナ禍のオンライン教育経験を次世代の大学づくりに活かす

## 講師

鈴木克明氏

● 熊本大学教授・教授システム研究センター長

## 日時

令和3年2月22日(月) 10:00~12:00

## 場所

学校法人越原学園 南4号館105講義室

本年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、本学でも部分的な導入が始まりました「遠隔授業」をテーマとして取り上げました。そこで、教育学、インストラクショナルデザイン、eラーニング、教育設計等をご専門にされている、熊本大学教授システム研究センター長の鈴木克明先生にお話を伺います。

## 講演概要

コロナ禍で突然前触れもなく訪れたキャンパス閉鎖の有事から立ち上がりとしている現在、その経験を次世代の大学づくりにどのように活かすことができるだろうか。教育学研究者として、また15年間のオンラインのみの大学院での教育実践を踏まえて、コロナ以前に戻るのではなく、オンライン教育の要素を組み入れることで大学を進化させていくために何ができるか、その方向性を提言する。



## 略歴

鈴木克明(すずき・かつあき)

国際基督教大学卒、Ph.D(教授システム学、フロリダ州立大学)

現在、日本教育工学会会長、教育システム情報学会顧問、日本イーラーニングコンソシアム名誉会員など  
主著に『学習設計マニュアル』(共編著)、『学習者中心の教育を実現するインストラクショナルデザイン理論とモデル』(監訳)などがある。

## 今年度(令和2年度)運営委員

## 委員長

森屋 裕治  
MORIYA Yuji  
(短期大学部)河合 玲子  
KAWAI Reiko  
(短期大学部)羽澄 直子  
HAZUMI Naoko  
(文学部)三宅 元子  
MIYAKE Motoko  
(家政学部)山田 久美子  
YAMADA Kumiko  
(健康科学部)

## 研究所メンバー

## 所長

渋谷 寿  
SHIBUYA Hisashi

## 顧問

河村 瑞江  
KAWAMURA Mizue

## 主任

山中 なつみ  
YAMANAKA Natsumi

## 教授

越原 一郎  
KOSHIHARA Ichiro

## 職員

牧野 弘実  
MAKINO Hiromi

## 編集後記

総合科学研究所だより31号をお届けいたします。本号では令和元年度の地域貢献事業ならびに機関研究の活動報告が掲載されています。地域の方々と学生の交流の様子や研究の進捗状況が詳細に伝わってまいります。執筆いただきました関係者の皆様に感謝いたします。令和元年度は年度末より新型コロナウイルスの感染拡大があらゆる活動に多大な影響を及ぼし、地域貢献事業では中止となった講座もありました。しばらくは感染防止のためにこれまでにない配慮や意識改革が必要とされますが、引き続き本研究所の研究活動ならびに地域貢献活動が継続、発展していくことを願います。今後とも皆様のご協力をよろしくお願いいたします。(文責：山中なつみ)